

48

門イB
173
巻

別段新聞

戊辰五月十六日

昭和十三年七月五日
佐藤四郎氏贈

一昨日大總督府より左の通りは内達ありしよし凡聞の
傳写し留む

徳川亡遺の悪徒共上野山内へ屯集し警衛を名とし僧侶
を威靡し暴激の所業有之とゆへとも寛宥の所置を以
て度々散去の儀は撫諭とる在は処門主を抱依し抗命の
次第叛逆顕然不為得止不日誅鋤の思召は間諸門
市在取締向嚴整に相心は出師のは沙汰可相待旨内
に仰出は事

辰五月

總督府 參謀

各藩隊長中

○
昨十五日朝未明より太鼓の音処々聞え下官軍繰出し相成り此門々橋々皆メ切とあり出入を止めらる間も無く砲声少く相きこえ湯嶋通り出火あり此頃中の大雨にて十分をめぐり有之折柄なれども手過ちの出火もあつべからざ何程只事ならずと思へとも往來留めなれども火元見の者を出る事も叶はず只相あつまりて此頃中の風聞を語り合ひ空しく出火の方角を詠め居たり

或と言ふ昨夜何國の兵とも知らず千五百人程千住口より江戸へ入込たり夫故戦争始まりたるならんと或と言ふ此程上野山内屯集の兵士錦の旗葵の紋の旗ふどを拵へ戦争の用意頻りありと或と言ふ當時江戸に府内も在て義を結ひ相盟約するの諸隊游撃隊銃隊撤兵隊を暫く言をす彰義隊純忠隊精忠隊盡義隊松石隊卧龍隊萬宇隊水心隊其他諸國の脱走兵士所々も潜伏し事を計る者幾萬人あるを知らず其徒一時相響應するよ於て如何なる事變を生せんも計り難くと衆説紛々更も定論無し
其時一人の來客あり曰諸公の話皆信するよ足らず昨日前

文の如く上野屯兵は追討の俊彌以て諸藩の各隊へ布告の
成たる事既に明り又聞えりやが參政一翁殿筑前守殿を初
め諸役人衆大に憂慮し 靜寛院宮様 天璋院様の如く直書
を持ち今曉未明に 大總督府へは猶豫の俊出願に相成り
しぐ時すてよおくれで最早官軍上野に於て戦を開きし跡
は成とりと是のみを實説ふり後の成行を如何とも知らず
と云ふ

うくて此日も大雨止まず砲聲屢々轟き火勢益々盛んして
老弱婦女難を逃れて道路よさまよふ者哀みの聲街市に滿
つ然れとも皆狼狽して逃れ來れる者のみふれを今日の様

子を問へとも一人として慥に答ふる者照し

出火の場所も上野山下湯島天神の邊廣小路池の端仲丁下
谷邊谷中邊凡五六ヶ處に火の手上りすさまじき事いもん
方無し兩國橋をも切落し大砲打掛くべき間立退きはれ
為知ありて兩國近邊の者俄に諸方へ立退き混雜す柳橋も
既に切落しとりと云ふ

夕方よ成て官軍追々歸陣し砲聲全く止み人々少しく安堵
の思ひをなす

火事を益々もりく上野山内にも火の手起り中堂は木坊
悉く焼失す宿坊も半も焼失せしよし

山内屯集の兵何方へ立退きしや 御門主様もいま落
着を聞かず

今朝一野邊より來りし者の話を聞けし廣小路片側焼失仲
町大抵焼失ししる由山下を雁鍋の邊より東側の小屋敷焼
失し廣徳寺前少く類焼す

廣小路邊より山内は死骸六十余人有り其外火災に依て怪
我日し名且雙方の怪我人多く有るべし追て委しき報告を
得て書載すべし

同日晝過大砲數發南方に聞とえたり右も何方の船もや蒸
氣船一艘品川へ入津せり

昨日の戦ひ大雨よて雙方共難戦ふりし官軍の方より追
と新手を入替くと攻立けるよぞ屯集の兵を應援無く遂に
敗走し及ひける大砲小銃分捕頗多し

團子坂の方類焼死亡最多き由

昨日黄昏吾妻橋の上よて戦ひ有りしと見へて橋上は鮮血
おひと、しく流れ鐵砲玉なども橋の邊に落散居たりと淺
草邊の者來り話せり兩國藏前邊よても砲聲を聞きし其
松子を詳からすと云

今朝王子の方よて又一戦有りし由彼方より來りし百姓途
中よて捨ひたりとて鐵砲の玉皮を持ち來れりシンナウ黄銅よて製

りたる管よて至極精巧なる者あり是まで未見當らざる品
とて勿論舶來の品あり定めて官軍の内精巧新式の銃を所
持する者有りと見へたり

附 施條銃新論 二卷西洋各國施條銃異同を比較し
圖を以て製式を示すの書あり 近日出來

今日公家衆一騎上野へ往きて巡見し玉ふ官軍あまの警衛
す

東照宮御靈屋を先く火災を免れ玉ふ

今日晝後 大總督府の印鑑又も田安殿一橋殿の印鑑所持
いこしはたも此門こく差支無く通行相叶い由

中外新聞第四十二號

慶應四年五月晦日

此觸書之寫

今般江戸鎮臺に差置いし付寺社町勘定之三奉行を爲廢別
紙之通に 仰出い條諸事是迄之通可相心得事

但寺社奉行所を寺社裁判所町奉行所を市政裁判所勘定
奉行所を民政裁判所と相唱可し事

右之通に 仰出い間不洩相可相觸事

○別紙

鎮臺

有栖川大總督宮